

あなたとの『ご報告文書』をスマホで打ちながら手コキされてからかわれるお話

(手コキ/胸揉み/ごっくん)

■ ■ ■ ■ ■

「——え〜っと……タイトルはやっぱりコレかな？ わかりやすく……“ご報告”……っと……♡」

女性の細い指が、左手に握ったスマートフォンの画面を走る。素っ気ないながらも滑らかに手入れされた爪先で、器用に文字を打ち込んでいく。

「ねえ、どうだろ？♡ やっぱ報告は、ボクのSNSでやるのがいいよね？♡」

あなたの右隣、ほとんど耳に密着するような距離から声がある。甘えるような、からかうような声。凛々しさのある声質だが、今の声色からすればむしろ可愛らしい印象を抱く。

「ねえ、答えてよ〜♡」

戸惑うあなたを翻弄するように、隣にいる女性——鳴瀬ユカリは、スマートフォンを操作している手と逆の手——右手の動きを速めた。

ユカリの右手は、あなたの腰の下——すでにはち切れんばかりに勃起している肉棒を握っている。

爪が肌を傷つけないように優しく、小さい手のひらをめいっばいに使い、包み込むように肉棒を掴んでいる。そうしてそのまま彼女が上下に腕を動かせば、それは手コキと呼ばれる行為以外の何物でも無かった。

「文章、一緒に考えよう？♡ ファンのみんなに“ご報告”する文章さ♡ えっと……“私事ですが、鳴瀬ユカリはこのたび、入籍致しました”って感じかな？♡ ほら、おちんちんも気持ちよくしてあげるからさ……ぬっちゅぬちゅ♡ ぬっちゅぬちゅ♡って♡ これで射精するまでに文章考えて、射精と同時に投稿しちゃお♡」

あなたの背筋をゾクゾクとした感触が上ってくる。しかしそれは、ユカリの“ご報告”を前にした緊張や恐怖ではなく、

自分の射精ひとつで彼女を大勢のファンから奪い取ってしまえるという、強烈な支配感による怖気だった。

「えへへ……♡ フォロワーさん、五十万人以上いるからね♡ ちょっと投稿して、すぐに消しても……絶対に誰かには見られちゃうね♡」

自分の人生がかかっているというのに、相変わらずユカリは悪戯半分の甘え声。あなたは、そんなユカリを止めようと首を動かす。

正直、あなたが正面を向いていても目に入るのは罪悪感を覚えるほどに勃起した自分の肉棒と、グロテスクで不浄の塊に感じられるソレを握るユカリの白い手だけ。そんな光景だけでも、目に毒。

あなたは意を決して顔を右に向ける。ユカリの声のする方向だ。そうして目に飛び込んでくるのは、至近距離に迫るユカリの顔。

「ん？♡ 何したの？♡」

声を潜めた会話の吐息がわかるくらいの距離だということに、ユカリの肌には毛穴一つ見えない。まるで人形のような。肌は白く透いていて、まつげは淡雪が積もるくらいに長い。ウルフに整えた黒髪は短くしてしまうのがもったいなく感じるほどに艶やかで、毛先の流れまで視線で追いたくなる。顔立ちは凛々しい印象を受けるが、上気した頬と潤んだ瞳が、ユカリに愛らしさを加えていた。



出鱈目だと、あなたは改めて思った。

美貌で言えば一級品。アイドルとも女優とも異なる、フィクションめいた美しさ。普通に目にするだけでも気が引ける、こんな至近距離で見て良いものではない。今のように、あなたが暮らす部屋にいていい女性ではないのだ。

ましてや彼女は——ユカリは、いま大人気のアイドル声優なのだから。

「なに？♡ ボクの顔を見ながらシコシコされるのがいいの？♡ キミ……けっこう甘えん坊なところあるよね♡ 可愛いよ♡」

しかし、当のユカリ自身が自分の立場や色々なしがらみに対して無頓着だ。いや、実際にはちゃんと思慮深く考えている面もあるのだろう。だが、少なくともあなたの困惑する姿を見たくて、こうしてからかってくる。

「ほら、キスしよ……♡ んっ……♡ ちゅ……♡」

そうして唇を奪われる。ユカリの柔らかく瑞々しい唇に触れられると、あなたの全神経は唇だけになったのかと錯覚してしまうようだった。全身が唇になったかのような多幸福感に包まれる。

「ちゅ……ん♡ ん、れろ……♡」

しかし、唇だけの触れ合いでは終わらない。ユカリの舌が、求めるようにあなたの口内へと滑り込んできく。甘い唾液に心地よい弾力。その求めを拒むことは、どんな理性にも不可能だった。

れろ……♡ ちゅぱっ……♡ ちゅ……♡

あなたと舌を絡め合い、上唇と下唇を交互についばみ、その間にもユカリは手の動きを止めない。

「ほら……ちゅこちゅこ……♡ ちゅこちゅこ……♡ いいでしょ、キスしながらの手コキ……♡ 気持ちいいね……♡」

亀頭からあふれでたカウパー液を細い指先ですくい、その

ままあなたの肉棒へ塗り込んで、また手コキを続ける。ユカリの手の動きに翻弄され、あなたの全身が緊張してくる。

だが、そんなあなたの緊張を、他ならぬ原因であるユカリ自身が諫めた。

「ダメだよ、力入れたら……ケガに響くから。——ほら、力入りそうになったら、代わりにココ……♡」

怪我。そう、あなたは怪我をしている。そのせいで、今すぐ両腕で壊れるくらいにユカリの細い身体を抱きしめたくとも叶わない。白い包帯で固定され、力なく床に垂れ下がっている左腕が恨めしくなった。

そんなあなたを慰めるように、ユカリは自らの身体を捧げてくれる。具体的に言えば、その豊満でこぼれそうな乳房を。

あなたの無事な方の腕——右腕を、ユカリは自分の乳房へと招き入れた。抵抗出来る筈はない。ユカリの乳房の感触、豊満さ、心地よさ。全部ぜんぶ、この世界であなただけが知っているのだから。

「んっ……♡」

あなたが乳房に触れた途端、少しだけわざとらしく声を漏らすユカリ。そんな仕草も気にならない。声と演技を生業にしている人間らしく、ユカリの声はダイレクトに性欲へ媚びてくる。

ユカリの乳房にあなたの右手が触れる。そのまま沈み込む。ブラジャーはあなたの部屋に来たときに既に外され、今はベッドの上。ユカリのファンが全財産を捧げてでも手に入れたいであろうブラは、取り込んだ後に畳むのが億劫な洗濯物と同じ扱いをされていた。

そうしてタンクトップをまくり上げれば、圧倒的ボリューム感のままユカリの乳房が姿を現わしていた。否応なしに押し付けられる柔らかな暴力。それを感じながらも、あなたはユカリの顔や手つき、そしてスマートフォンの画面から目が離せない。

「どうかな？♡ ボクのおっぱい、気持ちいい？♡」

気持ちよくないわけがない。あなたが頷くと、ユカリは嬉しそうに微笑んだ。

「よかった♡ 大きいと困ることばかりだけど……キミが喜んでくれるなら嬉しいな♡ 男の人はみんなおっぱいが好きだって聞くけど、本当なんだね♡ 普段はブラのサイズも二つくらい小さいのを着けてるのに……それでも、周りの人たちはボクの胸ばかり見てくるから……♡」

ユカリの声には挑発的な色が潜んでいた。そんな彼女の迷惑通り、あなたの独占欲が刺激される。親密な関係になったのはほんの一ヶ月か少し前でしかないのに、まるで自分のモノをつまみ食いされたような憤りがあなたを支配する。

「あ、んっ……♡」

ユカリの口から吐息混じりの甘い声が漏れた。今度は演技ではない、ホンモノだ。独占欲に駆られたあなたが、ユカリの乳房を強く揉んだ。ユカリのきめ細かい素肌はあなたの指に絡みつくようで、いつまでも触れていたいという欲求ばかりが燃え上がる。

「嬉しいな、キミがボクをたくさん求めてくれて……♡ 平気だよ、誰にも取られたりしないよ♡ 98センチのおっぱいも、頑張ってキープしてる細いお腹も、キュッと締まった小さいおしりも、全部ぜんぶキミのモノ……♡ キミだけが好きにしていんだよ……♡」

催眠のように流し込まれてくるユカリの声。彼女の声でそんな言葉をすりこまれては、本当にそうだと思えてくるから不思議だ。

「だから、ちゃんとみんなにも『ユカリは他人のモノ。もう予約済み』ってわかってもらわないとね♡ ご報告文書、早く考えないと♡」

あなたに見せつけるようにしながら、ユカリはスマートフォンの画面に文字を紡いでいく

「えっと……『お相手の男性は、一般の方です。少し甘えん坊で心配性なところがありますが、とても頼りになります。私がデビューした当初から支え続けてくれた、とても大切な人です』……っと。文字数ちょっとオーバーしちゃうか～」

耳のすぐそばで自分のことを指してそんな風に評価されると、あなたはこそばゆくなってしまう。快感で上気した息のままユカリに表現を何とか出来ないか提案するが――

「ダメダメ♡ だって、全部本当のことじゃん♡ そんなワガママ言うなら……手の動き、速くしちゃお♡」

そう言って、ユカリは手コキの動きをさらに速めるのだった。

こうなってしまうえば、というよりも肉棒を握られてしまった時点で、さらに遡るのであればユカリが家に入ってきてしまった時点で、あなたに勝ち目はない。

「ほら……射精しそうになったら、ボクのおっぱいを思いっきり揉んで良いから♡ そうやって我慢して、我慢して……で、いざ射精する時もむぎゅ～♡っておっぱいを揉んだら、絶対に最高に気持ちいい射精になるよ♡」

怪我をした部位に力を込めないようにすると、あなたの全身の緊張は、自身の手のひらを介して必然的にユカリの乳房

へと吸い込まれていく。ブラジャーの拘束を失ってもなお、丸々としてハリがあり、乳首は斜め上を向くような理想的な乳房。そのくせ、指で触れればどこまでも沈み込んでいく。揉もうものなら、変幻自在に形を変える。

その乳房の感触の素晴らしさが、さらにあなたの性感を加速させていくのだ。

「ふふっ♡ もう出ちゃいそうだね♡ 射精する時の顔してる♡ 本当はキスしながら射精させてあげたいけど……ボク、キミのその顔大好きなんだ♡ だから、今日はその顔たっぷり見せて♡ 射精する瞬間まで、ちゃんとね……♡」

ユカリの手の動きがフィニッシュへ向けて加速する。あなたに逃げ場はない。視線すら逸らせない。まるで少女のようにつぶらな瞳で自分自身を射抜いてくるユカリの視線を感じながら、荒い息を繰り返すしかない。

「ほら、出して～……♡ ボクの手にたくさん出して♡ ご報告射精しよ♡ アイドル声優のコト、自分のモノだ～って宣言する射精♡ た～くさん出していいよ♡ ほら、びゅ～♡

びゅ〜♡ びゅ〜って……♡ ——あっ……んっ……♡」

ユカリの催促が最後の引き金になって、あなたの我慢は限界に達した。

肉棒が限界まで膨張し、溜めに溜めた精液が尿道を遡ってくる。まるで肉棒の中を半固形の何かが通っているのかと錯覚するくらいにハッキリとした感覚がある。

「うわっ……すごい♡ 熱いの通ってるの、ボクの手でもわかるくらい……♡ 部屋が汚れても、後でボクが綺麗に掃除してあげるから、遠慮しないで出していいよ……てか、全部出させるね♡ びゅ〜♡ びゅ〜……♡ びゅるるるる〜♡ びゅるるるる〜♡」

最初の一射の後、ユカリはスマートフォンを傍らに置いて、左手であなたの亀頭を押さえる。そうして精液を全部自分の手で受け止めながら、右手では手コキを継続し、最後の一滴まで絞り出そうとしているのだ。

「びゅっ……びゅっ……♡ びゅるるる……びゅっ……♡ ——これで全部かな？♡ あはは、すごい量だね……♡ よく

出せました♡ んっ……ちゅ……♡ ちゅ、れろ……♡」

そうして最後は、あなたの射精を褒めるように再びディープキス。あなたは抵抗できるわけもなく、ただすべてを受け入れるだけ。行為としては完全に翻弄されているが、端から見ればあなたはユカリによる完璧な“奉仕”を受けている、まるで王様だった。

「うわ……手に精液すごい付いてる♡ どろどろしてるし……全然こぼれない……♡ ——あむっ……♡ ん、ちゅ……れろ……♡」

あなたとのキスを終えた後、ユカリは精液で汚れた自分の手のひらを興味津々に見つめ、そしてあろうことか口に含んでみせる。“こうすると嬉しいんだよね？”とでも言いたげな、挑発的な視線だ。

「んっ……く……♡ んっく……♡」

こくっ……♡ こくっ……♡

そうしてわざとらしく喉を慣らし、精液を飲み下していく。
普段からユカリが見せているパフォーマンスを知っている
人間なら、どうしてあれほどの演技や歌声が出せるのか不思議
なほど細い喉。それが膨らんでは元に戻りを繰り返して、
ユカリのすらりと引き締まったお腹の中へあなたの精液を
送り込んでいった。

「はあ……♡ ごちそうさま♡」

精液を飲み下し終わると、ユカリはまるで何事も無かった
かのように綺麗な顔立ちのまま、あなたに微笑んだ。

「——ご報告？　しないよ、冗談だって」

あなたの問いかけに対して、ユカリは笑いながら否定した。
先ほどまであなたの隣にいたユカリはちょうど手を洗い終
えてきたところ。

その刺激的な服装——丈の短いタンクトップにスキニー

のジーンズ、腹部は誇るように丸出しで、外に出るときはこの上に一枚羽織るだけという冗談のような私服も見えてしまい、精神衛生上非常によくない。

「事務所にも迷惑かかっちゃうし、キミにも迷惑かかるし…
…何より、ファンの人たちが混乱するからね」

片腕が利かないあなたの着替えを介助しながらユカリは言葉を続ける。非常に恥ずかしい状態なのだが、ユカリに強引に迫られてしまえばあなたには拒否権が無い。

「ああ、でも——キミとこうしているのは悪いコトじゃないんだよ？　ボクは必ず『ガチ恋はダメだよ』って言ってるしね」

そう。アイドル声優ではあるものの、ユカリの活動の大原則は“ガチ恋NG”である。けれど、そんなことを言われたところで人間の欲求は抑えられない。ユカリのガチ恋勢など探せばいくらでもいるし、良からぬ性欲を向けている人間はガチ恋の何倍もいるだろう。

「ま、ボクの目の届く範囲でなければ全然構わないけどね～。
ボクはあくまで、声優もアイドルもパフォーマーだと思っ
てるから。誰かを楽しませる職業……道化に恋する人なんてい
ないでしょ？」

それほど簡単なことではないと思うのだが、それでもユカ
リの考えを否定するつもりはない。あなたは何も言わず、た
だ頷いた。

——では、なぜそんなアイドル声優のユカリがあなたの家
にいるのか。あまつさえ、弄ぶように肉体関係まで持ってい
るのか。

そのキッカケは一ヶ月ほど前に遡る。

ユカリ編1 了